

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第18号 1992, 5, 7

発行

北海道ポーランド文化協会

〒060 札幌市中央区南2東2

河合楽器製作所北海道支社内

電話 011-231-8661

FAX 011-221-4936

ポーランド大使

歓迎パーティーへの

おさそい

【日時】五月二十二日(金) 午後七時より

【会場】すみれホテル(北一条西二丁目、

電話〇一―二六一―五二五二)

【参加費】三千元(当日会場でいただきます)

【申込期限】五月十四日(木)

＊駐日ポーランド共和国大使ヘンリック・リップシツツ氏が講演のため札幌へ来られる機会に、ポ文協会員が大使と親しくお目にかかり懇親を深めるため、大使歓迎のパーティーを開催します。立食形式の堅苦しくない集まりにしたいと計画中です。ふるってご参加ください。おおせいの会員で大使を歓迎しましょう。

＊準備の都合がありますので、同封のハガキで、期限までに申し込んでください。

なお申込の窓口は北海道ポーランド文化協会事務局
(電話〇一―二二三―一八六六一、河合楽器内戸田)

運営委員会の報告

今年度の第一回目の運営委員会が三月十九日(木)午後六時三十分から委員十三名が出席して開催された。そこで議論された内容の概略を紹介すると、

●行事計画——今後、講演会、映画会など可能なものから逐次実現して行く。また協会会員の数人が新しいポーランド大使と親しいので、機会をみつけて大使を札幌へ招待することとした。(これは別記のように、大使歓迎パーティーとして以外に早く実現することとなった。行事についての案や希望をどしどし事務局へお寄せください。)

●機関誌POLEの編集体制——いままでPOLEの発行に尽力して下さった小笠原正明さんが教育大学函館分校教授として移られるので、さし当り代わりを事務局長の吉田宏が務めることとなり、編集委員の斉田さん清水さんに協力することとした。なお小笠原さんの会計担当運営委員の仕事は適当な時機までそのまま続けてお願ひすることとした。

●ポーランド語講習会——次の第十期講習会は、前回からの継続として五月の連休明けから開始する。新

しい初心者のための講習会は別に計画することとした。

●会費納入状況——今年度の今まで(昨年十月から本年三月十五日まで)の会費収入は三五七〇〇円、支出は四七五一一六円で、一八五会員中九十七会員から会費納入があったとの報告があった。会費納入の督促に努めることになった。

運営委員会終了後、ポ文協の創設以来ずっと会運営に尽くしてこられた芳をねぎらって小笠原さんの送別会が行われた。(吉田 宏記)

— ニュース — シヨパン愛好会設立

シヨパンの音楽に興味をお持ちの方はだれでも入会できるシヨパン愛好会が札幌に設立されました。今まで日本シヨパン協会道支部がシヨパンの音楽の研究と普及をめざして活動を続けてこられました。が、活動を専門の音楽家から一般音楽愛好家まで広げようとして、遠藤道子氏(ポ文協副会長)が中心になり、この会が新たに設立されたそうです。

年会費は二千円で、シヨパン愛好会の申込先(事務局)はポ文協事務局と同じく河合楽器北海道支社(電話二三一・六六一)にあります。

ハリーナさんを囲む

楽しいポーランド語

●第一〇期のポーランド語講習会を開きます。

今期は前期に引き続いて初級の勉強を行います。

【期間】一九九二年五月十三日(水)より七月十五日(水)までの十週間

【時間】毎週水曜日の午後六時三十分から午後八時三十分までの二時間

【会場】北海道クリスチャンセンター

(住所)札幌市北区北七条西六丁目
(電話)〇一一七三六一三三三八

【講師】熊倉ハリーナ先生

【授業料】一万円二千円(十回分)

【申込先】北海道ポーランド文化協会事務局(〇六〇)札幌市中央区南二条東一丁目、(株)河合楽器製作所北海道支社内(戸田長裕気付)電話〇一一二二二一八六六一

または灰谷(札幌市東区北四十条東十丁目、電話〇一一七〇二一四九三九)まで

シヨパンとノルヴェイト

三浦洋

ポーランドという星雲がある。ヨーロッパという天幕に浮かぶその星雲状の国は遙か彼方において姿をとらえ難いが、宇宙にひととき大きな光を放つ数々の巨星によって知られる。ポーランドが人類史に与えた人々は、綺羅星の群像となって私たちの胸を射とめ、憧れを抱かせてきた。

「甦えるローザ・ルクセンブルク」なる記事読めば短絡的に涙が溢る
道浦母都子

淋しさのきはまりて聴く夜の
シヨパン心たぎりし日は還らざる
持田綱一郎

人それぞれにポーランドとの出会いの体験をもつ。ある人はコペルニクスによって、ある人はマリイースクウォドフスカ・キユリー（キユリー夫人）によって。歌人・道浦母都子にとっては全共闘世代が共有する記憶とともにローザ（ルージュヤ）・

ルクセンブルクという象徴が、またなにごとか失意を胸に秘めた持田綱一郎にとっては夜ごと聴くシヨパンの音楽が胸に沁みる体験なのである。

「灰とダイヤモンド」の詩

ポーランド出身の著名人を挙げれば尽きないが、アンジェイ・ワイダの秀作「灰とダイヤモンド」がわが国の文化に与えた影響は想像以上に大きい。ワイダら、ポーランド派の映画を観るために、日本の映画自主上映・鑑賞運動が起こったことは記憶されてよい。「灰とダイヤモンド」の主人公マチュク（ズビグニェフ・チブルスキ）の姿を見て生き方を決めたと語る人もいるほどだ。個人的なことを言えば、あの映画でマチュクが話す何でもない一言の台詞を聴きとれた感銘が、今もって私をポーランド語の勉強に向かわせている（皆さんも是非、講習会へ御参加下さい）。

「灰とダイヤモンド」という題名は、小説の方の作者アンジェイエフスキが、独立したポーランドの知識人に再評価された一九世紀の詩人ツイブリアン・カミル・ノルヴェイトの作品「舞台裏にて」の中の一節から採ったものである。このノルヴェイトという不遇の詩人については、最近わが国でも紹介されつつあるが、一つ、とても興味深いことが意外に知られていない。それは、音楽家シヨパンと詩人ノルヴェイトがパリで親しくしていたことである。

二人がパリで出会ったのは一八四八年末と推定され、シヨパンの短い生涯の最晩年の親交であったようだ。シヨパンの歌曲にノルヴェイトの詩による作品こそないが、ノルヴェイトはシヨパンの芸術を自作「黒い花」「プロメテイデオンの」などの詩で賛

え、「シヨパンのピアノ」と題した作品も創作している。ともに亡命ポーランド人の身の上で、祖国に誇りを持つ芸術家としての連帯感も強かっただろうし、一九世紀ヨーロッパ文化の文脈では詩と音楽が近しかったという背景もあろう。実は、それ以上に、二人には意外な絆があった。かつて、ワルシャワでシヨパン一家が住んでいた家（クラコフスキエ・ブシエドミエシチ通り五番地のクラシンスキ宮殿と呼ばれた所）が、のちに美術アカデミーとなって、そこでノルヴェイトは美術を学んだのである（彼は画家でもあった）。

だから二人は、パリで知り合ったとき郷愁にかられながらこんな会話を交わしたかもしれない。
シヨパン「ワルシャワで暮らした最

CYPRIAN NORWID PISMA WYBRANE

Wybrał i opracował
Juliusz W. Gomulicki



PAŃSTWOWY INSTYTUT
WYDAWNICZY

後の家はよかった。聖十字架教会も同じ並びでね。あれから一五年以上経ったけど忘れはしない」ノルヴィト「ああ、あなた(注・シヨパンの方が年上)の家は美術学校になりましたね。そこで私は勉強したんです」

一八四九年のシヨパンの死

当時のシヨパンはジョルジュ・サンドとの9年間の生活に終止符を打った後で、健康悪化の一途にあった。やがて一八四九年十月十七日、シヨパンは亡くなる。臨終に立ち会ったグジマワによれば、その日は水曜日で午前二時にシヨパンは息をひきとった。その翌十八日、ノルヴィトはシヨパンの死去を公にする告示文を書いている。これはいわば、同朋ポーランド人芸術家によって起草された公式なシヨパン追悼文といえよう。その内容の一部は、アーサー・ヘドリーら欧米のシヨパン研究家が著書に引用したものの邦訳があるが、全文を知りたくなかった私は、ポーランドで出版された「ノルヴィト全集」をひもといて訳を試みた。以下がその拙訳である。

追悼・フリデリク・シヨパン
ワルシャワの出にしてポーランド

の心、そして世界の人々にとっての才能であったフリデリク・シヨパンがこの世を去った。胸の病が、三十九歳という少壮の芸術家の死を早め、命を奪ったのである。一十月十七日だった。

彼は、至難な芸術の課題を精妙な技量によって解き得た。野の花々を、それらから一滴の露も、一番



CYPRIAN NORWID

のわざであり、それを為したのがフリデリク・シヨパンなのである。

彼は生涯のほとんどを(すなわち主たる年月を)祖国の外で、祖国のために生きた。

それは異国の地で達成し得る至上的なことであり、それをフリデリク・シヨパンは達成した。

(中略)

軽い綿毛をも散らさず摘み得たのである。そして彼は、言い得ぬ明星、流星となった。ヨーロッパ中に輝く彗星となり、理想の芸術を高揚させた。

野に散ったポーランドの人々の涙は、妙なる調和の結晶となって、人類の宝冠の美しきダイヤモンドに寄り集まった。

これこそ 芸術家が為し得る至上

ノルヴィトは、この世の至上の価値——芸術や祖国ポーランドそのものをダイヤモンドで象徴するのを好んだようである。

コハノフスキは「ソプトカ」において初めて世界に民族詩を示したが、音楽において同様のことをシヨパンが為したのである。
パリ、一八四九年十月十八日

ローマ法王も若き日に心酔

現在のローマ法王ヨハネ・パウロ二世ことカロール・ヴォイティワ氏も、学生時代に、ポーランドのポードレルと呼ばれるノルヴィトの象徴詩に心酔し、自身でも詩作して発表したとのことである(M・マリンスキ著「ヨハネ・パウロ二世」)。演劇を愛して戯曲を書き、哲学論文に打ち込んだヴォイティワ。昨年のクリスマスメッセージで自由の大切さを世界に説いたこの法王も、二十世紀精神史に巨大な足跡を残すポーランド人となるにちがいない。

(ポ文協会員)

投稿歓迎

会員からの寄稿を歓迎します。例えばポーランド旅行された方の報告や、その他ポーランドに関すること何でもどうぞ。

「ポレ」編集委員会

斎田道子・清水保子

吉田 宏

〔連絡先〕 621-1738 (斎田)